

住まいのトレンドと 心地よいコミュニティの 街づくり

昨年創刊50周年を迎えた『住まいの設計』と今年30周年を迎える『エッセ』。競争の激しい出版業界において、常に好調な販売部数を記録してきた老舗の雑誌です。それぞれテーマや読者層は異なりながらも、時代のトレンドをもっとも鋭くキャッチしてきたこの二つの雑誌の編集長に、住まいと生活、そしてこれからの街のデザインについて語っていただきました。

鈴木 康之氏

住まいと暮らしの専門誌
SUMAI no SEKKEI『住まいの設計』
編集長

小林 孝延氏

生活情報誌 ESSE『エッセ』
編集長

『住まいの設計』と

『エッセ』の編集方針

鈴木 『住まいの設計』は昨年の秋に50周年を迎えました。創刊した当時の日本人は将来への希望が高く、大学を卒業すると、人々はまず家族を守る一軒の家を持つとうとしました。どんな家を望み、そこでどんな暮らしをしたいのか。そのような住まいの夢や希望を応援する雑誌として『住まいの設計』は誕生しました。今もその編集方針は変わっていません。

小林 『エッセ』は今年の10月7日で30周年を迎えます。25歳から40歳の幅広い主婦層をメイン読者に、料理や収納、住まいのインテリアなどを中心に、生活全般に関する記事を取り上げてきました。生活情報誌がたくさんある中で、『エッセ』の読者は「暮らし」に対する意識が非常に高く、エコロジーの記事で紹介した情報などもすぐに生活の中に取り入れます。そんなアクティブな生活スタイルの人たちに支持されています。お母さんから子供へ、あるいは孫へと世代を超えてコミュニケーションできる媒体になっていると思います。

ライフスタイルの変化と 住まいの変化

鈴木 30年前とライフスタイルは変

化していると感じますか。

小林 僕は『エッセ』の編集に関わって3年ぐらいですが、編集会議でテーマの変遷を調べるために30年間のコンテンツをすべて検証してみました。そこで気がついたのは、基本的に30年前とベースになる部分はあまり変わっていない、ということですが、もちろんその時代ごとの流行はあります。しかし3月号でとりあげ支持された、生活に不要なものを捨てることで暮らしを整える「断捨離（ダンシヤリ）」などもそうですが、人気企画の本質的な部分は今も昔も変わりませんね。



『エッセ』 2011年3月号

昔から男性は、車やステレオなど、モノに自分の夢を託すことが多いようですが、女性は特別なモノではな

くとも普段の暮らしの中にも夢を見ることができると。例えば、料理の記事は、レシピを知るためだけのものではなく、料理を作り皆でいただく、

素敵なライフシーンを想像させるものです。女性にとって夢は常に現実の生活と近い場所にあるんですね。

鈴木 ライフスタイルの基本は変化していないということですが、住まいを取り巻く環境は大きく変化しています。その変化に対応するために、『住まいの設計』ではテーマ本も発行しています。例えば『MY HOME 100選』は、多様化する一戸建てを建てる楽しみを紹介した本です。

持ち家といえば、50年前には一戸建てしか選択肢はなかったのですが、今はマンションという選択もあります。昨年からは、中古マンションをリノベーションして自分らしく暮らすというムック※も出しています。

小林 住まい選びに、変化はありますか。

鈴木 データから見ると、一生の間に家づくりの山が二つあります。一つは30代子育て世代。もう一つは定年後の終の住処を探すとき。なかでも、30代は家づくりの適齢期と私たちは考えています。この子育て世代は、持ち家志向が非常に強いようです。

また戦後しばらくの日本人は、住まいに関しては画一的な傾向があったのですが、今の30代には堅実であ

りながら、しかもセンスの良さを感じます。例えば、子供室として使っていた部屋を、子供が成長すればシアタールームに変えるなど柔軟な発想があります。かつては家に自分を合わせて暮らしていましたが、現在では家族の暮らしに合わせて家を変更していくという、創造的な「住む力」を持っています。



別冊 住まいの設計『リライフプラス』 Vol.6

リビング中心から キッチン中心の住まいへ

小林 今まで住まいの中心といえば、リビングでした。ところが、最近はキッチンを中心として暮らしを考えることが徐々に浸透しつつあるようです。

※1. マガジン（雑誌）とブック（本）を組み合わせた造語

『エッセ』にそのようなキッチン特集を載せると必ず反響があります。家づくりでは、奥さんが主導権を握っていますから、やはりキッチンがメインテーマになりますね。

鈴木 以前は、キッチンは壁や食器棚で閉ざされていました。ところが今や、取材にうかがうお宅の9割以上が「作る場」と「食べる場」が一体となった対面キッチンです。これはキッチンがコントロールタワーのように住まいの中心に位置づけられ、機能し始めていることを意味しています。キッチンは、リビングに代わって家の主役の座を獲得し、リビング化しているともいえるでしょう。以前は南側



『住まいの設計』 2011年5・6月号

にキッチンをつくるなんて考える人はいませんでした。ところが今は、キッチンをまず快適な場所に配置して、それをもとに住まいのプランニングを始めるケースがあるほどです。
小林 そうですね。これまでは住まいの構成をLDKと呼んできましたが、キッチンが家族の共有する空間としてメインになると、KDLという方がふさわしい気がします。同時にリビングは多様化しているようです。大画面テレビの普及によりリビングをホームシアター化したいという要望は増えています。また子供にとつては、大画面テレビのあるリビングは、友達とゲームをする交遊の場ともなっています。

鈴木 キッチンが「家族の集う場所」に変化していくなか、リビングは住み手の自由な空間になってきましたね。人を招くパーテイスペース、家族のスタディコーナーのあるリビングなどはとてもいいなと思います。また、屋外にテラスを設け、空を感じ



こばやし・たかのぶ
1967年福井県生まれ。『Outdoor』（山と溪谷社刊）編集長ほか、アウトドア雑誌を多数創刊後、ナチュラルライフをテーマにした女性誌『天然生活』を創刊。2007年より扶桑社『ESSE』編集長。

じながらティータイムや読書を楽しむアウトリビングも増えています。これはもう本来のリビングではありませんが、それでもいいのだと思います。大切なのは、部屋ではなく、「場」をつくることです。それは家全体にいえることですが、LDKの中に面白味

別冊 住まいの設計
『小さな庭から始める ガーデンライフBOOK』

のあるスペースをつくる。パソコンコーナーや書斎コーナーなど小さなスペースでもいいのです。
小林 生活者は、夢やプランはたくさんお持ちになっていると思います。それを実現するには、固定観念に捕われずに、いろんなことができる場として、自由に空間づくりを考えていただきたいですね。

インターネットを利用して自己表現

小林 最近行ったアンケート調査で、『エッセ』の読者にある傾向が見られることがわかりました。自分の家にアトリエをつくろうとしている方が多い、ということです。例えば、裁縫を趣味とする方がミシンを置くスペースを家の中に確保する。スペースのない方は、押し入れを改造して、ミシンを入れて裁縫室をつくる。あくまで自分の趣味として楽しんでいるのですが、中にはその趣味でお小遣いを稼ぐ方も現れました。料理のレシピをブログや専門のサイトにアップして、ポイントを貯めるなど、趣味と実益をかねている方も増えています。

鈴木 それはいつ頃から起こったのですか。

小林 ここ5年ほどのことです。ちょうどネット環境が整備され、ブログが普及してきた頃です。ブログを利用

している方々は、自分を表現したい、社会参加したい、という欲求が高いのです。僕もブログをやっていますが、反響があることも嬉しい。それが生活の張りになることもあります。
鈴木 10年前までの主婦は、家庭に拘束されている時間が長く、社会との交流が少なかった。それが、ブログなどでやつと解放され始めた。子育て中のお母さんは子育てのことを話題にすることが多いですが、子供に手がかからなくなると、自己表現の欲求が強くなるようです。

ネットと印刷媒体とを使い分ける

鈴木 情報端末でいえば、携帯電話の影響力は大きいです。ケータイは単なる通信手段ではなく、情報収集のツールとして活用されています。パソコンではなく、活動しながら使えるケータイでなければならぬのです。彼女たちは情報を取り扱う能力に長けていますね。

小林 しかも印刷媒体とネットをうまく利用されています。

鈴木 そうです。情報習熟度の高い方々は、本や雑誌は読まないかという、そんなことはありません。ネットと本をうまく使い分けておられます。例えば、家を建てようとする場合、『住まいの設計』を手に取って家づくり

これからの街づくりに必要なのは、「地球家族」と「地球資源」という発想です。

の全体の流れを把握する。その後、ネットでキーワード検索して詳細な情報を入力するというように、印刷媒体とネットをうまく補完し合える関係で利用されています。
小林 料理の情報に関しても、うまく補つてますね。燻製や手作りソーセージなどの非日常の料理を作る場合、ネットのレシピを活用し、日常的な弁当などには、スーパーに行く前に雑誌を手にしてレシピを確認するといった使い分けをされています。

「地球家族」という発想で街づくりを考える

小林 ここまでは、個人のライフスタイルや住まいがテーマでしたが、今後個人の生活を考える上で、共同体の問題すなわち街づくりが大きなテーマになるのではないのでしょうか。

鈴木 そうですね。70年代のカルチャーで注目された中に、バックミンスター・フラーという人が書いた『宇宙船地

球号操縦マニュアル』があります。フラーはその本で、地球に暮らす人々は、すべて同じ乗組員であり、資源や地球環境を考える中でも運命共同体だと言っています。非常に大きな話ですが、地球に住む人々を一つの家族としてとらえ、そこから地球のデザインを考え、これまでのライフスタイルを見直そうと提唱したのです。

小林 なるほど、「地球家族」と「地球資源」という発想はコミュニティにも当てはめることができますね。街のデザインを考える場合には、都市の骨格となる道路や公共交通を設計して、そこに安全で低炭素の職場や住居を配置し、効率の良いエネルギーを供給することが基本ですが、さらに「資源と環境」を共有する「家族」という概念を加えることは、これからの街づくりに大切ですね。

鈴木 その街に、豊かな自然や防災を、どのように組み込んでいくかが重要です。運動公園や広域公園を設ける際にも、防災機能を目立たせないようなデザインも大切です。その一方で、住まいのインテリアにこだわるように、身の回りに心地よい環境を整えることも大切でしょう。野鳥が訪れるエリアを計画して巣箱をデザインしたり、ゴミ箱にまでこだわる、心地いいコミュニティを考えること、こうした街づくりが今後

は必要だと思っています。